



<b>Data</b>
監督・脚本: 河瀬直美
出演: ジュリエット・ピノシュ/永瀬正敏/岩田剛典/美波/森山未來/田中泯/夏木マリ

### ■■■ショートコメント■■■

◆カンヌ国際映画祭を中心にした活動と活躍が目立つ河瀬直美監督は奈良県出身で、「なら国際映画祭」を主宰している。その地域密着型、世界発信型を特徴とする独自のスタイルは目を見張るものがあるが、河瀬作品の好き嫌いはハッキリ分かれており、私はどちらかというと嫌い。それは、彼女のデビュー作でカンヌ国際映画祭カメラドール（新人監督賞）を受賞した『萌の朱雀』（97年）をテレビで観た時からだ。私の評価としては、まさに「カッコつけ」「評判倒れ」という言葉がぴったりだった。

奈良を活動の舞台とする彼女だが、実は本来の自分のルーツが奄美大島にあることを知った河瀬監督はその後、『2つ目の窓』（14年）を監督したが、これはまずまずだった（『シネマ33』76頁）。しかし、河瀬作品があまり好きでない私は、その後の『あん』（15年）や『光』（17年）を観ていない。しかし、最新作の『Vision』は試写の案内をもらったため、試写室へ。

◆河瀬作品はタイトルも内容も抽象的だが、それは本作も同じ。永瀬正敏は河瀬作品の常連だが、フランス人女優・ジュリエット・ピノシュは世界的ビッグネーム。そんな世界的大女優とカンヌの映画祭で一緒になり、話をしている中で次の企画を相談し、それを実現させるところが河瀬流。彼女が参加する映画化の話をホンモノにするのだからすごいものだ。

もちろん、本作も河瀬監督のオリジナル脚本に基づくもので、当然ジュリエット・ピノシュ扮するジャンヌは日本へやってくる観光客という設定だが、その目的は「葉狩り」とのこと。しかし「葉狩り」って一体ナニ？本作のタイトルは「Vision」だが、その意味も含めて、分かったような分からないような、クソ難しい哲学的な設定がいかにも河瀬流だ。また、そこに絡む、夏木マリ扮する老女・アキの存在感がこれまたすごい。彼女が語る「100年に1度の時が迫っている」との予言めいた言葉はどこか不気味だが、それが本作のもう一つのテーマである吉野の森（の自然）の美しさと相まって、本作を独特の河瀬流世界観

に観客を惹き込んでゆくので、それに注目！

◆吉野の山深い森の中で、猟犬のコウと共に1人で生活している48歳の男・智（永瀬正敏）が、何の抵抗もなくフランス人女性ジャンヌと英語で会話できる不自然さは横においても、いきなり智とジャンヌがラブシーンに入ったことにはビックリ！こりゃ一体なぜ・・・？

また、本作後半には、智が山の中から救い出した謎の青年・鈴（岩田剛典）が登場することによって、さらに不思議さが増していく。智が鈴に昼間の林業の仕事を手伝わせたのはいかなもの（？）だが、それはさておき、後半ではさらにジャンヌと鈴とのラブシーンも登場するので、アレレ・・・？いやいや、これはラブシーンと言ってはダメなのかも知れないのかも・・・？

◆本作は冒頭、猟師の源（田中泯）が森の中で鉄砲の音を響かせるシーンからスタートするが、彼の表情を見ると、何かを誤って撃ってしまったことが明らかだ。そんな冒頭の疑問点は本作ラストで明かされる（？）ので、それに注目！もっとも、そこではさらに猟師の岳（森山未來）も登場してくるので、人間関係はややこしい。これらの男たちとジャンヌは一体どのように絡まっているの・・・？そんな展開の中に本作のタイトルである「Vision」の意味が含まれているそうだから、それはあなた自身の目でしっかりと。もっとも、私にはサッパリわからなかったが・・・。

森山未來が自分の名前に「未來」とつけるのは自由だが、「Vision」を「未来」と置き換え、本作の中で智が見い出す「Vision（未来）」を、私たちに共に見つけさせようとするのは、ちょっと横暴なのでは？私はそうした河瀬流のやり方が、あまり気に入らないのだが・・・。

2018（平成30）年5月14日記